春から夏へ。「晴れの国」を彩る花風景（岡山県）

関西学院大学総合政策学部 教授
佐山 浩

1. 味も風景も一級品・フルーツ王国のモモ

モモはブドウとともにフルーツ王国・岡山を代表する果物である。生産地の吉備丘陵は「吉備丘陵の白桃」として2001（平成 13）年に環境省の「かおり風景 100 選」の一つに選定されている。なだらかなその地には広大な桃畑が広がり、毎年３月下旬から４月上旬にかけて一面がピンク色に染まる。とりわけ岡山市 一宮 地域（一宮山崎・佐山・芳賀 など）、倉敷市 玉島 地域（玉島 八島 など）、そして本宮 高倉山 の麓（赤磐市 鴨前 など）が代表格である。

写真1 「清水白桃発祥の地」の碑

岡山でモモの栽培が本格的に始まったのは明治の初めの頃とされる。1901（明治 34）年に 大久保重五郎 が育てた品種が実の色から「白桃 」と名付けられた。1932（昭和 7）年には岡山を代表する優れた品種「清水白桃」が「白桃と岡山 3 号の混植園の中の実生」（有岡利幸（2012））から 西岡 仲一 により発見された。岡山では多くの白桃系品種が栽培されているが、地域団体商標として登録されている「岡山白桃」は岡山県産の白桃の総称である。白い気品のある肌の仕上がりは丁寧な袋掛け作業の結晶である。収穫するまで風雨や害虫などから守られ、また、日光が遮られることで繊維質の発達が抑えられて口当たりが滑らかになるという。

岡山市北区 の 芳賀佐山 団地付近の県道 238 号沿い 新池 の畔には「清水白桃発祥の地」の碑が立つ（写真1）。磐梨郡 弥上村 山ノ池 （現・岡山市東区 瀬戸町 塩納 ）には大久保重五郎の顕彰碑が、赤磐市 可真上 の旧可真小学校跡（現・赤磐市 熊山 老人憩いの家）には岡山県果樹振興の祖とされ大久保が師事して果樹栽培を学んだ 小山 益太 と大久保両名の顕彰碑が建てられている。小山益太は1861（文久元）年、磐梨郡 稗 田 村（現・赤磐市稗田）に生まれた。「金桃 」、「六水 」の2品種のモモを生み出したほか、防虫剤として全国で広く使用された「六液 」を考え出したことなどで知られる。小山は、大原美術館の設立などでも知られる 大原 孫三郎 からの評価も高く、1914（大正 3）年に大原奨農会農業研究所（現・岡山大学資源植物科学研究所）の創設時に招かれた。果樹園を作り、実地指導を行うとともに農家への技術指導も行った。1924（大正 13）年の小山の没後、大原孫三郎は果樹園の名前を小山の雅号から 楽山園 とした。その功績を讃えて 1935（昭和 10）年には、大原家により楽山園の中に顕彰碑が建てられた（現在、顕彰碑は岡山大学資源植物科学研究所敷地内に移設されている）。

2. 鶴山公園のサクラ

鶴山公園は岡山県の北部・津山 市にある。津山城跡がその公園で1,000 本ほどのサクラが石垣や2005（平成 17）年に完成した 備中 櫓 をバックに咲き乱れる。近くには岡山の三大河川のひとつ・吉井川が流

写真2　満開時期のサクラ

れる。津山城は織田信長に仕えて本能寺の変で討ち死にした森蘭丸らの末弟の森忠政が、美作一国 18 万石余を受封した翌年から鶴山に築城した平山城である。10年以上の歳月をかけて 1616(元和 2)年に一応の完成をみた。城は「鶴山城」とも呼ばれた。1874(明治 7)年から翌年には、石垣を除き、五層四庇の天守閣などの建物や門などすべてのものが取り壊されたが、1900(明治 33)年には旧津山町営の鶴山公園として開放された。公園面積は約 8.5ha である。

ここのサクラの植樹の中心となったのが 1905(明治 38)年に津山町議として初当選した福井純一である。私財を投じ、寄付集めに奔走したと伝えられている。サクラの本数が増えて、1907(明治 40)年頃には公園としての様相が一通り整った。さらに 1915(大正 4)年と 1928(昭和 3)年には二度の御大典記念植樹が行われ、城跡が一面のサクラで覆われるようになったといわれている。

3. 藤公園のフジ

藤公園は岡山県東部・JR 和気駅北東 3 kmほどの和気町藤野にあり、1985(昭和 60)年に開園した。この地で生まれ、平安遷都の推進や造営などで知られる和気清麻呂の生誕 1,250 年を記念して整備された。広さは 0.7ha ほどである。園内には、国・県・市町村指定の天然記念物 79 種類を含む 98 種類以外に海外からきたフジも植えられている。北海道から鹿児島県まで 46 都道府県のほか、中国と韓国から集められた全体の種数は約 100 種類となり、花の房の長いものから短いものまで形態はさまざまである。その種類の多さから「日本一の藤公園」として宣伝されている。花の色も紫からピンクや白いものまでさまざまなものが幅 7m、高さ 2.5m、総延長 500m の藤棚を彩る。藤棚の下は通路となっており、藤を仰ぎながら、時には長い房をかき分けながら約 150 本のフジを楽しめる。

写真3　フジの咲く藤公園

4. 備中国分寺のレンゲ

吉備路は、岡山市北西部から総社市にかけての一帯の総称である。春になると吉備路のシンボルである備中国分寺の五重塔を背にして、レンゲの花が絨毯のように一面に広がる。今から 40 年ほど前、化学肥料の普及により見られなくなったレンゲ畑の風景を復活させたいとの地元の人々の願いから、周辺の農家の協力を得てレンゲの種まきが始められた。当初の規模は 0.5ha と小規模だったという。

風景の中心に存する五重塔は 1844(弘化元)年頃に完成したといわれ、五重塔として重要文化財に指定されている。備中国分寺は奈良時代に仏教の力で天災や飢饉から国を守ることを目的として聖武天皇の発願によって全国に建立された国分寺のひとつである。中世には衰退し、江戸時代中期に日照山国分寺として復興した。五重塔をはじめとして現存する伽藍はすべて江戸時代に建てられたものである。

写真4 レンゲの花と五重塔

この周辺一帯は吉備路 風土記の丘県立自然公園に指定されている。自然公園内には備中国分寺跡、備中国分尼寺跡のほか、5 世紀前半につくられた造山古墳がある。全国で 4 番目に大きな墳長約 350m の前方後円墳である。

5. 笠岡 湾干拓地の花畑

笠岡湾干拓地は岡山県の西部にあり、花畑は 2011(平成 23)年にオープンした道の駅笠岡ベイファームに隣接する。春には 1,000 万本のナノハナや 1,000 万本のポピー、夏には 100 万本のヒマワリ、そして秋には 3,000 万本のコスモスが訪れた人々を出迎えてくれる。

写真4 夏のヒマワリ

笠岡湾の干拓の歴史は江戸時代初期の新田開発に始まったと伝えられ、近世を通じて造成された約 300ha が笠岡市の基盤となっている。1958(昭和 33)年には 105ha の国営旧笠岡湾(富岡)干拓地が造成された。花畑の広がる土地は 1966(昭和 41)年に始まり 1990(平成 2)年に終了した国営笠岡湾干拓建設事業で整備された農業用地 1,191ha の一部である。島遍路や神島天神祭で知られた神島は、1970(昭和 45)年には神島大橋により本土とつながっていたが、事業が終了している現在では完全に陸続きとなっている。干拓地内には、近隣の農産物を大消費地に空輸するために飛行場(笠岡ふれあい空港)があり、防災拠点やスカイスポーツやさまざまなイベント会場としても利用されている。

【引用・参考文献等】

1)西田正憲・佐山浩・水谷知生他『47 都道府県・花風景百科』丸善出版、2019

2)有岡利幸『ものと人間の文化史 157・桃(もも)』法政大学出版会、2012

3)全国農業協同組合連合会(JA 全農)『Apron エプロン』480、2018